

# 300年の時を経て知る 先人の知恵と治水への思い ～富士山宝永の噴火から300年～



町の東部を流れ、足柄平野を潤す酒匂川。現代の私たちの生活のなかでは、その穏やかな姿をあたりまえに捉えてしまっていないでしょうか。去年9月の台風では、十文字橋が落橋するなど、暴れ川としての一面を垣間見たと感じた方も多かったことでしょう。

宝永4年(1707年)11月23日、富士山の東南斜面が噴火。足柄平野にも同年12月8日ごろまで、16日間にわたって大量の軽石や砂などが降り続けました。今の暦にすると、この11月23日から12月8日というのは、12月16日から1月1日ごろにあたるといいます。ちょうど300年前の今ごろ、先人たちは大変な災害に見舞われていたのです。

噴火によって降り積もった砂を取り除かなければ作物もできず、酒匂川上流や山地に積もった砂が流れ出し、川が氾濫。岩流瀬土手と大口土手が切れるなど、人々の苦難の日々が始まりました。

長い時間を要した災害からの復興。調べてみると、特に酒匂川の治水対策に関しては数々の知恵が残されていることがわかります。

宝永の噴火から300年。今は穏やかな流れを見せる酒匂川のほとりを歩きながら先人たちの知恵と思いをたどってみました。

## 台風で変わった酒匂川の流れ

昨年9月7日午前1時15分ごろ、酒匂川に架かる十文字橋の途中部分がV字形に曲がって落下しました。台風9号が強い勢力で小田原市付近に上陸したためです。「台風猛威」「県内つめ跡」「12人重軽傷」「停電、道路陥没」の新聞の見出しが踊り、県内では床上浸水は37棟だったと報道されました。

酒匂川の濁流がいつ治まるのか、じわじわとした恐怖感と付き合いつつ、眼下に広がる川を見ていました。日に日に、元の姿に戻ろうとする様子ではあるのですが、いつまで待っても見慣れた川筋にはならないので、違和感が拭えません。それは、十文字橋の橋脚が沈んでしまった影響でした。



9月7日の酒匂川と十文字橋

300年前の宝永山噴火に思いをはせる時、想像を絶する恐怖と不安に押しつぶされながらも、自然とただただ向き合い挑む先人の思いに敬意を表し、エールを送りたい気持ちでいっぱいになりました。

## 足柄平野にかけぬ田中丘隅の思い

宝永噴火の翌年、宝永5年(1708年)に酒匂川が氾濫し、大口土手が切れてしまいました。そして、正徳元年(1711年)の大水害で大口土手は大きく切れ、酒匂川の流れが西側に変わってしまいました。西側(千津島村・和田河原村など)と東側(吉田島村・栢山村など)との間で酒匂川の川筋をめぐって対立が起きました。大岡越前守忠相が深くかかわって、酒匂川の流れを元に戻すように決定しました。無事に工事が終了し、対立も収まったそうです。そのとき大岡越前守が登用した幕府の役人が田中丘隅でした。

田中丘隅は、中国の治水の神である禹王(禹)は、黄河の洪水を防ぐために一生をかけて堤防を築きました。その功績で中国の初の王朝である夏の国王になりました。禹王の字が文命(ぶんめい)です。文命を祭る文命社を建て、酒匂川治水の要所である岩流瀬、大口の二つの堤防上でお祭りを続けるよう命じ、それらを「文命堤」と名付けました。今でも、南足柄にある福沢神社の堤を文命東堤、岩流瀬橋の堤を文命西堤と呼んでいま

す。丘隅が建てた文命堤の記念碑には、文命宮(現在の福沢神社)の祭典のときに石を一つずつ持つてくるように、また堤には木を植えるように諭しています。大勢の人々が祭りに来ることで土手を踏み固めたり、災害時に使えるように石を備えたりと、土手の重要さを切々と訴えたかったのでしょう。大口の祭りは5月5・6日で、今も盛大に行われています。

対岸に立つ六地藏  
酒匂川で氾濫が最も多かった6か所に建てられているお地藏さんを、田中

丘隅は「川丈六地藏」と名付けました。酒匂川を人間の体に見立て、凶のように対岸に建っているのが特徴です。みな一対どころも大事な場所です、どこか一か所でも崩れると、川全体のバランスが崩れ大変なことになります。こういうことを意識づけるための命名であろうと言われています。

お地藏さんを建てた目的は、たくさんの人々に来てもらい、その足で土手を固めるとともに、氾濫しそうな危険な場所を実際に見ることで、防災意識を高めてもらうというものでしょう。先人の堤防の守り方や、足柄平野の未来まで思いをはせていたことがしみじみ感じられます。

## 六地藏の位置



頭は上流の岩流瀬①と大口②、真ん中の腹は中流の三角土手③と九十間土手④、脚は下流の飯泉⑤と多古⑥です。

富士山宝永大噴火300年史調査研究会発行  
「富士山と酒匂川」より